様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０６２４

研究課題名（和文）日本における家の歴史的展開と現状に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Study on Contemporary Japanese Family based on the Historical Ie-Perspective

研究代表者
平井　晶子（HIRAI, SHOKO）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：３０４６４２５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：家変動論を精緻化しつつ、家的視点を用いた現代の家族・親族関係の解明をめざし、子育て期の家族についての資料収集・分析・考察を行った。その結果、大都市近郊都市の家族・親族の特徴は、地元層と非地元層に大きく分かれること、6割を占める地元層では30分以内に居住する祖父母から充実した育児支援を得ているが、3割の非地元層は孤立した育児を強いられること、地元層は伝統的「あととり」観念を持つが、家規範には否定的であることなど、家と現代都市家族との関連が明らかになった。現代家族の理解を一層深めるために家的視点を導入する意義ならびに道筋を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：We explored family and kin relationships from the perspective of the ie, aiming to advance the theory on the transformation of the ie itself. In order to deepen the knowledge on family and kin relationships, we gathered, analyzed, and interpreted the data on families in their childrearing phase. The results of this study revealed that there is a continuity between the ie and contemporary families, reflected in different experiences of the local population and the non-local population in a suburb of Nagoya City Moreover, the traditional ideology of “the family successor” is preserved in the value system of the “locals” even if they do not support the other norms related to the ie. Thus, the results of this study underlined that it is necessary to introduce the perspective of the ie into the research on families in order to reach a more comprehensive understanding of their contemporary forms.

研究分野：社会学

キーワード：家　家族　親族ネットワーク　子育てネットワーク　愛知県

１．研究開始当初の背景
戦後の日本家族は「家から現代家族に変化した」と認識され、現代家族については、とりわけ都市の現代家族については、家的側面への言及が極めて少ない。しかし戦後家族の特徴である「近代家族」の時代性が明らかになるにつれ、近代家族に収斂不可能な側面の再解釈が求められている。本研究では、歴史的な家研究を再興しながら、家を軸に据えた現代家族の考察を目指す。

２．研究の目的
「日本における家の歴史的展開と現状に関する実証的研究」では、次の 3 つを目的に研究を進めた。

(1)研究代表者が提示してきた近世農村における家の変動仮説（東北農村では 19 世紀初頭に家らしい家が確立した）を新たな資料を用いた分析から検証し、家変動論の基盤を整備する。

(2)歴史的家研究を踏まえ、現代の都市居住者の親族間サポートの実態と、継承に関する意識（および実践）との関係について現地調査を行い家の現代的特質を明らかにする。家の現代的特質の解明をもとに、現代家族のもうひとつの家族像を提示する。

(3)近世の家研究を軸に家の現代的特性を考察し、現代家族論の新しい地平を切り開く。

３．研究の方法
本研究の研究期間は 4 年間であり、歴史的研究を進展させつつ、歴史的研究から見えてくる家の観点を導入したと現代家族の実証研究を行うことで、新しい現代家族像にアプローチする。

(1) 歴史分析については、これまで研究代表者が進めてきた家の歴史人口学的方法を用いて、東北の一農村（現在の山形県天童市）の戸口資料データベースの分析を行い、家の変動過程を解明し、家変動論の再検討を行う。

(2) 現代の分析については、これまで大阪で実施した子育て期の親族サポートと家との関連に関する分析方法を、修正・発展させながら、家的視点を用いて現代家族へアプローチする。具体的には、愛知県刈谷市を調査地に定め、大都市近郊地域における子育て期の都市家族の、親族関係（サポートや居住の実態）と家認識・家規範に焦点をあて、両者の関連を考察する。

(3) 本研究の調査地：大都市近郊都市である愛知県刈谷市に調査地を定め、就学前の子どもをもつ親と祖父母を対象に調査票調査を実施した。すなわち、子どもからみて、母親・父親、祖父母の三者にそれぞれ調査票を配布し、それぞれの家族・親族関係の実態や意識、家に関する意識や実態について資料収集を行った。現代家族における家的要素に関する調査を行う本研究では、大都市近郊都市でかつ伝統ある地域を調査対象に選定した。

４．研究成果
(1)家変動論の検証
①従来の仮説：東北農村の家は、世帯・ライフコースの均質化により 19 世紀初頭に確立（一般化）したとの見通しを、東北地方の太平洋側の人口減少地域の歴史人口学的研究結果から得ていた。

②本研究の成果：従来の仮説を導き出した地域とは、奥羽山脈を挟んだ反対側に位置する東北地方の日本海側の人口増加地域の歴史人口学的分析を実施し、そこでも 19 世紀初頭に家らしい家が確立したことが明らかになった。仮説同様、本研究でも、世帯・ライフコースの均質化が進み、家らしい家が近代に先駆けて 19 世紀初頭に一般化していたことが確認でき、従来の仮説を補強することができた。

③歴史的家研究の今後の課題：近代に先駆けて確立した家が、近代社会の誕生にどのようなインパクトを与えたのか、また、近代に先駆けて確立した家が、明治・大正期にどのように変動したのか、人口変動も含め明らかにしていく必要がある。

(2)家的視点を取り込んだ現代の家族・親族関係の実証研究の成果
①従来の研究：都市部の親族ネットワークは脆弱で、子育ては孤立傾向にあるというのが一般的理解であった。

②本研究の成果の概要：家的視点を用いた分析の結果、都市における子育て世代の家族は、地元出身者が作る家族＝＜地元層＞と、比較的遠方からの流入者により形成された家族＝＜非地元層＞でその特徴が大きく異なることが明らかになった。以下では、顕著な研究成果 5 点についてまとめた。

③本研究の具体的成果
③-(ⅰ)親との居住形態：親との同居は全体の 1 割と少ないが、いずれかの親が徒歩圏内にいる割合は 35%で、30 分圏内まで広げると 57%にのぼる。子育て世代は、30 分以内で行き来可能な 6 割の＜地元層＞と、1 時間以上かかる 3 割の＜非地元層＞に二分される。

③-(ⅱ)育児の支え手：育児の中心的な支え手は、配偶者と双方の親であり、それ以外では、「子どもが産まれる前の友人」が幾分頼りになる程度で、多様な支え手がいる状況からはほど遠い。双方の親のなかでは、妻方の祖母がもっとも優勢であったが、近くに住んでい

るほど頼りになる傾向も見られた。つまり、＜地元層＞と＜非地元層＞で得られる支援に格差が大きいことが浮かび上がってきた。地元層は祖父母の近くで暮らし、育児支援を多面的に得ているが、非地元層は、親からの身体的支援を受けにくく、育児の支え手が配偶者に限定され、孤独な育児を強いられる傾向が強い。今後、広く育児支援政策を検討する際、本研究で明らかになった、＜地元層＞と＜非地元層＞の格差は重要なポイントになると考えられる。

③-（iii）「あととり」観念：夫を「あととり」と考えるケースが全体の 6 割と高い。なかでも「あととり」観念が高いグループには、親との同居・近居が多く、「あととり」観念が、単なる観念ではなく、生活上の諸関係と結び着いていることが見えてきた。この「あととり」観念が居住の近接性と連動しているということは、現代の都市家族でさえ、家的要素が重要であることを示している。

③-（iv）相続と家族規範：本研究は伝統的な地域で実施したが、祖父母世代での流入者が多く、何世代にもわたり家や土地を継承してきた層は一部に限られていた。そのためか、継承期待は父母、祖父母ともにあまり高くはなかった。また、「あととり」観念を持つ層でも、「親とは同居すべき」という同居規範や、「財産はあととりが単独で相続すべき」という単独相続規範は弱かった。このように、「あととり」観念と、同居や相続規範は連動しておらず、家的観念の現代的展開が複雑であること、慎重な検討を要する問題であること明らかになった。

③-（ｖ）夫婦の役割分担：家事・育児の大部分を妻が担っているが（母親の回答者のうち専業主婦が 6 割、育休中が 2 割弱）、いずれも概ね現状を「公平」と考えていた。ただし、父親は、今後も現状維持を望むが、妻は、夫の分担増を期待いているというように、今後の家庭内での分担に関する希望には、夫と妻で大きな認識の差が見られた。また、家事・育児を概ね妻が担っていることから、この点に関しては、＜地元層＞と＜非地元層＞に顕著な差がみられなかったことも記しておく。

(3)本研究の意義
日本家族は、戦後、「家から現代家族へ」変化したと理解されてきたため、家的視点からの家族研究（とりわけ都市家族）はほとんど行われなくなった。しかし、本研究が示したように、家的要素は今でも都市の家族を特徴づける重要な要素である。家族研究者のもつ家理解そのものが「封建遺制」という古い認識でできているため、家的観点からの現代家族分析はリアリティを持ちえないと考えられているのかもしれないが、本研究では、家変動論を再検討し、家認識そのものを刷新することができた。これをもとに新しい家論から現代家族を捉える具体的な事例を示し得たのであり、本研究により新たな家族論を示す端緒を示し得たと考えている。

(4)今後の展望
家的視点からの現状に関する資料収集ならびに基礎的考察は行ったものの、本資料にはさらなる分析の可能性が残されている。本資料を活かした考察をさらに広範囲で展開し、現代家族についてのもうひとつのリアルな家族像、家的視点からの家族像を社会に対しても、関連諸学会に対しても発信していく予定である。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　6　件）
① 平井　晶子、書評　清水浩昭『高齢化社会日本の家族と介護：地域性からの接近』（時潮社、2013）、家族社会学研究、日本家族社会学会誌、査読なし、26 巻 1 号、2014、53-54

② 李　璟媛、津村　美穂、未就学児父親におけるしつけと虐待の実態と意識：2000 年と 2010 年調査の比較、比較家族史研究、比較家族史学会誌、査読有、28 巻、2014、88-118

③ 山根　真理・洪　上旭・朴　京淑・李　東輝・長坂　格・中筋　紀子、アジアの社会変動と産育のネットワーク：5 地域ライフコース調査から、愛知教育大学研究報告、査読有、63 巻、2014、155-166

④ 李　璟媛・呉　貞玉、国際結婚の実態と課題に関する日本と韓国の比較研究、International Journal of Family Welfare、査読有、4 巻、2013、67-87

⑤ 平井　晶子、近世村落における家の変容、社会学雑誌、神戸大学社会学研究会、査読なし、30 巻、2013、78-90

⑥ 岩本　恵・山根　真理・杉浦　淳吉、落語表現に見る家族像の変遷：「芝浜」の分析を中心として、研究紀要、愛知教育大学家政教育講座、査読なし、42 巻、2013、69-81

〔学会発表〕（計　15　件）
① 平井　晶子、兵庫県但馬地域の国際結婚家族の現状：2014 年のアンケート調査を中心に、日本村落研究学会大会、2015 年 11 月 7-8 日、和良町民センター（岐阜県）

② 平井　晶子、愛知県刈谷市の事例にみる住宅・居住形態・親族関係：人口減少社会における住宅・家族・コミュニティ（２）、日本社会学会大会、2015 年 9 月 19-20 日、

早稲田大学（東京都）

③ 平井　晶子、現代日本の親族関係：刈谷市質問紙調査の分析を中心に、日本家族社会学会大会、2015 年 9 月 5-6 日、大手門学院大学（大阪府）

④ 山根　真理、現代の育児の「しんどさ」は、どこにあるのか？――刈谷市質問紙調査の育児ストレスに関する分析を中心に、日本家族社会学会大会、2015 年 9 月 5-6 日、大手門学院大学（大阪府）

⑤ 湯川　隆子、山根　真理、ほか、ジェンダー問題を再見する：教育・保育・家庭の現場から（研究委員会企画シンポジウム）、日本教育心理学会大会、2015 年 8 月 19 日、朱鷺メッセ（新潟県）

⑥ 平井　晶子、近世後期における家の確立：東北農村と西南海村、比較家族史学会大会、2015 年 6 月 21-22 日、札幌大学（北海道）

⑦ 山根　真理・平井　晶子・李　璟媛、現代の地方都市における育児援助ネットワーク：2013 年愛知県刈谷市調査データを中心に、家族関係学セミナー大会、2014 年 10 月 11-12 日、大妻女子大学（東京都）

⑧ HIRAI Shoko, Household Continuity and Migration in Japanese Farming Villages Between the 18th and 19th centuries, ESSHC（ヨーロッパ社会経済史会議）、2014 年 4 月 23-26 日、ウィーン（オーストリア）

⑨ Yamane Mari, Meaning of Adulthood and Its Vacillation: The Case in Japan, Korean Association of Family Relations(招待講演)、2013年11月1日、ソウル（韓国）

⑩ Yamane Mari et al., Social Change in 20 Century's Asia an Life Course of the Elderly: Focusing on Childbirth and Childcare Networks in Five Societies, IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, 2013 年 6 月 5 日、ソウル（韓国）

⑪ 李　璟媛・呉　貞玉、韓国の未就学児の保護者におけるしつけと虐待の実態と認識、日本家政学会大会、2013 年 5 月 19 日、昭和女子大学（東京都）

⑫ 上本めぐみ・李　璟媛、教員養成課程の大学生における児童虐待に関する意識、日本家政学会大会、2013 年 5 月 19 日、昭和女子大学（東京都）

⑬ 山根　真理、ほか、20 世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース：5 地域質問紙調査結果から、日本社会学会大会、2012 年 11 月 4 日、北海道大学（北海道）

⑭ 平井　晶子、近世東北農村における家と同族：「家」確立の歴史人口学的分析、日本家族社会学会大会、2012 年 9 月 16-17 日、お茶の水女子大学（東京都）

⑮ HIRAI Shoko, Rethinking Theories and Realities of the 'Ie' in Japan, ESSHC（ヨーロッパ社会経済史会議）、2012 年 4 月 11-14 日、グラスゴー（UK）

〔図書〕（計　4　件）

① 平井　晶子、山根　真理、李　璟媛、報告書、日本における家の歴史的展開と現状に関する実証的研究：愛知県刈谷市における子育て期の家族・親族関係と支援ネットワークに関するアンケート調査を中心に、2016、172

② 平井　晶子　ほか、ミネルヴァ書房、徳川日本の家族と地域性：歴史人口学との対話、2015、524（39-61、435-459、493-521）

③ 平井　晶子　ほか、思文閣出版、徳川社会と日本の近代化、2015、708（407-423）

④ HIRAI Shoko et al., Ehime University, Finding 'Ie' in Western Society?: Historical Empirical Study for the Paralleling and Contrasting Between Japan and Europe, 2013,249(29-61)

６．研究組織

(1)研究代表者

平井　晶子　（HIRAI, Shoko）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：３０４６４２５９

(2)研究分担者

藤井　勝　（FUJII, Masaru）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：２０１６５３４３

山根　真理　（YAMANE, Mari）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２４２８９４

(3)連携研究者

李　璟媛　（LEE, Kyoung-Won）
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：９０２６３４２５